法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

<研究ノート>キャリアセンターが提供するキャリア教育科目の効果測定 : CAVTを用いた検討

SAKAZUME, Hiromi / 瀬戸, 健太郎 / 田澤, 実 / 梅崎, 修 / 武石, 恵美子 / 坂爪, 洋美 / SETO, Kentaro / TAZAWA, Minoru / UMEZAKI, Osamu / TAKEISHI, Emiko

(出版者 / Publisher)
法政大学キャリアデザイン学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
生涯学習とキャリアデザイン / Lifelong Learning and Career Studies
(巻 / Volume)
20
(号 / Number)
2
(開始ページ / Start Page)
69
(終了ページ / End Page)
81
(発行年 / Year)
2023-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00030109

〈研究ノート〉

キャリアセンターが提供するキャリア教育科目の効果測定
―CAVT を用いた検討―

早稲田大学大学院　瀬戸　健太郎
法政大学キャリアデザイン学部教授　田澤　実
法政大学キャリアデザイン学部教授　梅崎　修
法政大学キャリアデザイン学部教授　武石　恵美子
法政大学キャリアデザイン学部教授　坂爪　洋美

1　問題設定

本稿の目的は大学のキャリアセンターが提供しているキャリア教育科目を通じて学生のキャリア意識が高まるのかについて明らかにすることである。

正課科目として実施されている大学のキャリア教育はおよそ以下の２つに分類が可能である。

第一に、ある学部のカリキュラムに含まれるキャリア教育科目である。この場合、その学部に所属する学生向けに、学部等の教育上の目的に応じた内容が展開されることになる。効果測定を考える際には、その学部のカリキュラムの中で同科目の位置づけを明確にする必要がある。

第二に、複数の学部に所属する学生向けのキャリア教育科目である。キャリアセンターなどが提供する事があり、学部横断型のキャリア教育科目と呼ばれることもある。効果測定を行う際には、特定のひとつの学部のカリキュラムの中での位置づけを考慮する必要はないものの、比較的大規模で行われるため、たとえば学部による差など属性の影響をどこまで考えるのか判断が必要になる。本研究は後者に位置づく。

2　先行研究のレビュー

大学におけるキャリア教育では、浦坂（2012）が述べるように、学校段階と学校の属性に着目して効果を考えることが重要である。たとえば、高卒就職と大卒就職とでは、前者が１人１社制や実績関係（苅谷　1989）といった、就職活動において独特な慣行を持つため、キャリア教育においてもその意味づけは大きく異なると考えられるためである。以下、大学のキャリア教育科目に関する先行研究をレビューする。

小山（2019）によれば初年次キャリア教育科目の効果は、キャリア関連の見通しや行動について、学生の自己効力感を上昇はさせるもののそれは微増であり、学術的能力認識をより引き上げると報告している。

桑原他（2014）では、キャリア教育科目の受講について、進路選択自己効力感の高さが科目

選択に影響を与えていない可能性を指摘しつつ、キャリ教育科目の受講が、進路選択自己効力感に与える影響を、分散分析を用いた時点間比較で明らかにしている。他にも、佐藤・杉本（2015）でもほぼ同じ結果が得られており、キャリア教育科目の効果が確認されている。

一方、因果推論的な枠組みを用いた研究では結果が分かれている。平尾（2019）は、自然実験の枠組みを利用して、キャリア教育の有効性について分析した研究であるが、実験群は統制群に比べても、キャリア教育によってキャリアへの見通し・行動ともに上昇していることが明らかにされている。他方、宮田（2020）は傾向スコア補正法を用いて、実験群と統制群の間でキャリア教育科目の効果は、「就職基礎能力」と「内定獲得」の２つのアウトカムに対していずれも効果が見られないと報告している。

このように、多くの研究では時系列的な変化か、実験群と統制群を用いて、キャリア教育科目の効果を測定しており、総じて、効果量の大小は別にして、緩やかにキャリアに関する見通しや行動に影響を与えていると言えるが、一部では必ずしも支持されないという結果も析出されている。一方で、それが「誰にとって有用だったか」という点の分析は乏しい。つまり、実験群と統制群を用いて、時点間比較を行うことでキャリア教育科目の介入効果を多くの研究では測定しようとしているが、そこでは属性による効果の異質性は検討俎上にはのぼっていない。この点は葛城（2009）が述べるように、キャリア教育科目について、例えば専攻分野一つとってもニーズの実感には差が存在することからも、キャリア教育科目の介入効果の異質性も、存在することが示唆される。

そこで本稿では、比較的、大規模に測定されているキャリア教育科目の効果測定に関するデータを用いて、キャリア教育科目の効果のカテゴリカルな相違を確認していくことにする。

3　データの概要・分析手続き

（1）データの概要

データの概要について述べる。本稿では、法政大学キャリアセンターによるキャリア教育科目（正課授業）の「キャリアデザイン入門」の受講者データを扱う。同科目は自身のキャリア設計や仕事についての理解を深める授業構成となっている。学部横断型で展開しており、１年生より受講可能である。2022年度はオンデマンド形式と対面形式を合わせて４科目設置した。

調査は受講者に対して、講義の受講中に１回、受講後に１回の合計２回、回答を求めたものであり、質問紙では性別、学部学科、年齢、受験した入試経路、法政大学の志望度、キャリア意識の発達に関する効果測定テスト（キャリア･アクション･ビジョン・テスト：CAVT）を用いている[1)]。この他に質問紙では尋ねていないが、学務データから「キャリアデザイン入門」の成績評価、2022年春学期のGPA、累積GPAを抽出し、回答者に紐づけている。

調査実施時期は第１回が、2022年４月から５月、第２回が　７月であり、オンラインでの回答フォームにより、受講者に質問紙を配布した。

基本統計量は表１に示す。回収数は第１回調査がN=2555､第２回調査がN=1920であった。なお、分析に際しては､性別「その他」のケース数（N= ６）が極端に少ないため、除外している。結果、分析ケース数は第１回調査がN=2549、第２回調査がN=1916である。科目選択が必修ではないので、葛城（2009）の指摘を超えることはできないが、他方で、他の先行研究と比較してもケース数が多いため、細かく「誰に効果があったか」というカテゴリカルな違いを分析するのに､適していると言える。

（2）分析方法

分析方法について述べる。本データは事前事後の２回測定しているパネルデータとなっている。パネルデータは一般に、観測されない異質性をコントロールできるという強みがある一方、脱落（attrition）問題が生じることが知られている。つまり、継続回答する回答者は受講態度が

真面目であることや、そもそも自身のキャリアに早くから問題意識を抱いているといったことが挙げられ、単純に脱落サンプルを除外すると、特にCATV得点が高く出ることが推測される。そこで本稿では、第１回調査に回答しているが、第２回調査には回答していないケースを脱落サンプルとして定義し、脱落ウェイトによる補正を行う。脱落ウェイトの作成にあたっては、三輪（2014）の指摘に従い、第一段階でプロビットモデルを用いて継続確率を推計し、第二段階でその逆確率を求める。第三段階で母集団分布に一致するように逆確率ウェイトを調整する。母集団分布は公開データで入手可能な、法政大学の学部×男女の学生比率からウェイト値を作成し、これを逆確率ウェイトに反映させた。以降、表１～３を除いて、本稿で提示するスコアはすべて、ここで作成したスコアで重み付けした数値である。

表1：基本統計量

	N	最小値	最大値	平均値	標準偏差
女性	2549	0	1.00	0.46	-
男性	2549	0	1.00	0.54	-
20歳以上	2549	0	1.00	0.15	-
20歳未満	2549	0	1.00	0.85	-
第一志望	2549	0	1.00	0.57	-
第二志望	2549	0	1.00	0.21	-
第三志望以降	2549	0	1.00	0.22	-
キャリアデザイン学部	2549	0	1.00	0.02	-
スポーツ健康学部	2549	0	1.00	0.09	-
経営学部	2549	0	1.00	0.11	-
経済学部	2549	0	1.00	0.17	-
現代福祉学部	2549	0	1.00	0.12	-
国際文化学部	2549	0	1.00	0.02	-
社会学部	2549	0	1.00	0.27	-
人間環境学部	2549	0	1.00	0.06	-
文学部	2549	0	1.00	0.06	-
法学部	2549	0	1.00	0.08	-
一般入試	2549	0	1.00	0.51	-
指定校	2549	0	1.00	0.22	-
付属校	2549	0	1.00	0.18	-
スポーツ推薦	2549	0	1.00	0.03	-
留学生入試	2549	0	1.00	0.02	-
その他	2549	0	1.00	0.04	-
継続	2549	0	1.00	0.03	-
2022年度春学期GPA	2549	0	4.08	2.69	0.68
ビジョン得点_受講中	1916	6	30.00	18.59	5.68
ビジョン得点_受講後	1916	6	30.00	20.56	5.49
アクション得点_受講中	1916	6	30.00	19.85	5.02
アクション得点_受講後	1916	6	30.00	21.21	5.03

4　分析結果

（1）ウェイト作成

表２は属性別の継続確率、表３は回答継続に関する、プロビットモデルの推定結果である。表２を確認すると、いくつか属性によって傾向が異なることがわかる。

第一に、学部で見れば経営学部と文学部で脱落確率が高くなるなど、あまり一貫した傾向が見られない。葛城（2009）によれば、学部間でキャリア教育のニーズは学生にとっても大きく異なると指摘しており、それが継続確率にも反映されていると考えられる。文学部のような人文系の学部の方が、大学４年時の進路が就職以外にも、進学や、就職するにしても教員や公務員など、企業以外の進路を意識している割合が高いと推測される

表2：属性×継続確率

	脱落	継続	N
性別			
女性	20.59%	79.41%	1185
男性	28.52%	71.48%	1364
年齢			
20歳以上	20.53%	79.47%	380
20歳未満	25.59%	74.41%	2169
志望度			
第一志望	23.62%	76.38%	1448
第二志望	25.95%	74.05%	528
第三志望以降	26.88%	73.12%	573
学部			
キャリアデザイン学部	38.18%	61.82%	55
スポーツ健康学部	14.29%	85.71%	224
経営学部	36.99%	63.01%	292
経済学部	23.11%	76.89%	424
現代福祉学部	16.78%	83.22%	304
国際文化学部	36.84%	63.16%	57
社会学部	16.81%	83.19%	690
人間環境学部	40.56%	59.44%	143
文学部	34.64%	65.36%	153
法学部	36.23%	63.77%	207
入試経路			
一般入試	26.54%	73.46%	1311
指定校	22.16%	77.84%	555
付属校	24.16%	75.84%	447
スポーツ推薦	26.74%	73.26%	86
留学生入試	20.45%	79.55%	44
その他	20.75%	79.25%	106

が、経営学部の継続率も低く、学部が科目選好を代理していても、一貫した傾向が見出せない。ただし、非受講者も含めたデータが収集されていないため、あくまで推測にすぎない。

第二に、表３を見ると、「キャリアデザイン入門」を除いたGPAと科目落第ダミーの効果は、予想通りGPAがプラス、科目落第がマイナスであった。二宮（2022）によれば、成績A割合が高いほど、脱落確率が低下することを大学生パネル調査から明らかにしており、この傾向は山口（2019）が分析した「JLPS高卒パネル調査」の高校成績でも妥当している。本調査ではケースの大半が20歳未満であることから、二宮（2022）と山口（2019）のサンプルの間の年齢が、本稿でのボリュームゾーンであるが、基本的な結果は妥当する。二宮によれば成績の高さは、向学校文化へのコミットを反映していると推測しているが、同様に、向学校文化や生真面目さといった傾向が妥当しているものと推測される。

第三に、志望度や入試経路の影響はほとんど見られない。入試経路と成績との関係は、倉本・大津（2011）によれば、AO入試ルートの入学者の方が、学業適応は高いと報告していたが、キャリア科目のようなものの場合にはその効果が必ずしも見られないのかもしれない。

以上をまとめると、（１）科目選択時に生じていると推測される選好、（２）大学成績によって継続確率は大きく異なる一方、（３）志望度や入試形態はそれほど影響しないという特徴が本データからは見られる。

（２）CATVスコアの時点間比較

①性別×時点間の推移

上記の手続きで求めた継続確率の逆確率に、母集団分布を反映したウェイト値を反映して、属性×受講前後の推移はどのような様相を呈するのだろうか。各種の属性ごとに、その特徴を見ていく。

図１から性別との関連を確認すると、女性のビジョン得点の伸び方は17.30→19.56、男性は19.05→20.74と女性の方がスコア伸び方は若干高い傾向が見られる。ただし、初期値に1.5ポイント程度の差があるため、初期値のビハインドを反映したものであると考える方が、おそらく妥当であると考えられる。女性の方がビジョン得点が低い理由は、女性の方が性別役割分業を労働市場において意識せざるをえないため、見通しを持ちにくいことが挙げられると考えられる。

では、この傾向はアクション得点ではどうだろうか。図２は性別×時点のアクション得点の推移であるが、基本的な傾向はビジョン得点と大きく変わらない。ただし、初期値について言えば男女の格差はビジョン得点ほどの差がない。職業的キャリアの見通しと違って、行動となると就職活動が本格化する時期か否かによる違いが大きく、性別による差はそこまで大きくないのかもしれない。

表３：継続確率推定のプロビットモデル[2)]

	AMPE	B	s.e.
男性（基準：女性）	-0.04	-0.17**	0.07
学部（基準：キャリアデザイン学部）			
スポーツ健康学部	-0.05	-0.25	0.25
経営学部	-0.08	-0.36	0.22
経済学部	-0.13	-0.56**	0.23
現代福祉学部	-0.09	-0.39	0.24
国際文化学部	-0.05	-0.26	0.28
社会学部	-0.06	-0.26	0.23
人間環境学部	-0.10	-0.43*	0.24
文学部	-0.13	-0.53**	0.24
法学部	-0.07	-0.32	0.23
20歳未満（基準：20歳以上）	-0.01	-0.06	0.10
志望度（基準：第一志望）			
第二志望	-0.02	-0.06	0.09
第三志望以降	-0.01	-0.05	0.09
入試経路（基準：一般入試）			
指定校	-0.02	-0.09	0.10
付属校	0.00	-0.01	0.10
スポーツ推薦	0.03	0.12	0.18
留学生入試	0.05	0.24	0.25
その他	0.03	0.13	0.17
2022年度春学期GPA	0.13	0.50***	0.05
落第（基準：及第）	-0.27	-1.05***	0.19
定数項		-0.94***	0.32
N		2549	
Log Likelihood		-1149.83	
Akaike Inf. Crit.		2347.65	

注１. ＋ p<0.1 * p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001
注２. 教員×受講形態の組み合わせのダミー変数も投入しているが、省略している。

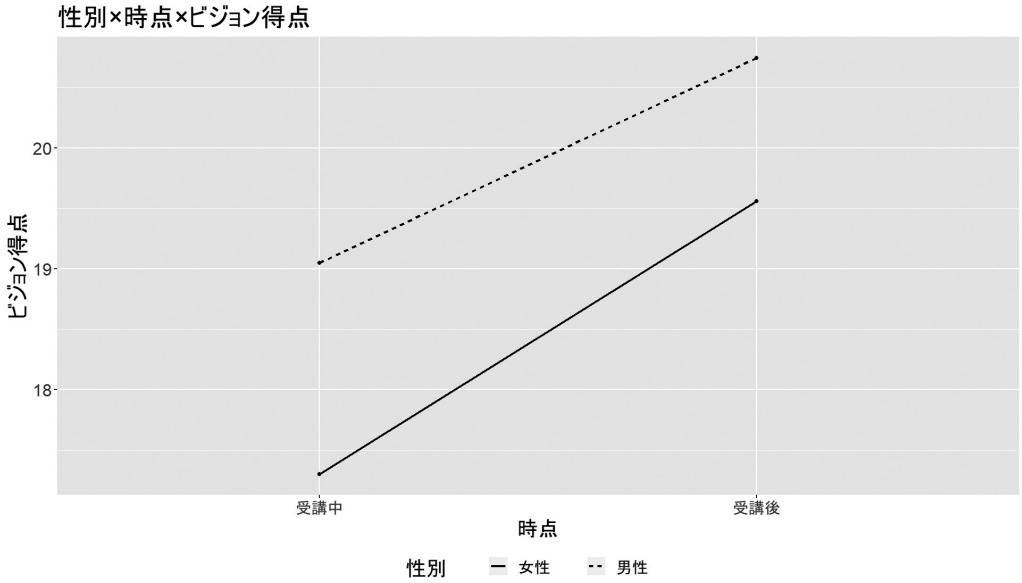

図１：性別×時点間のビジョン得点

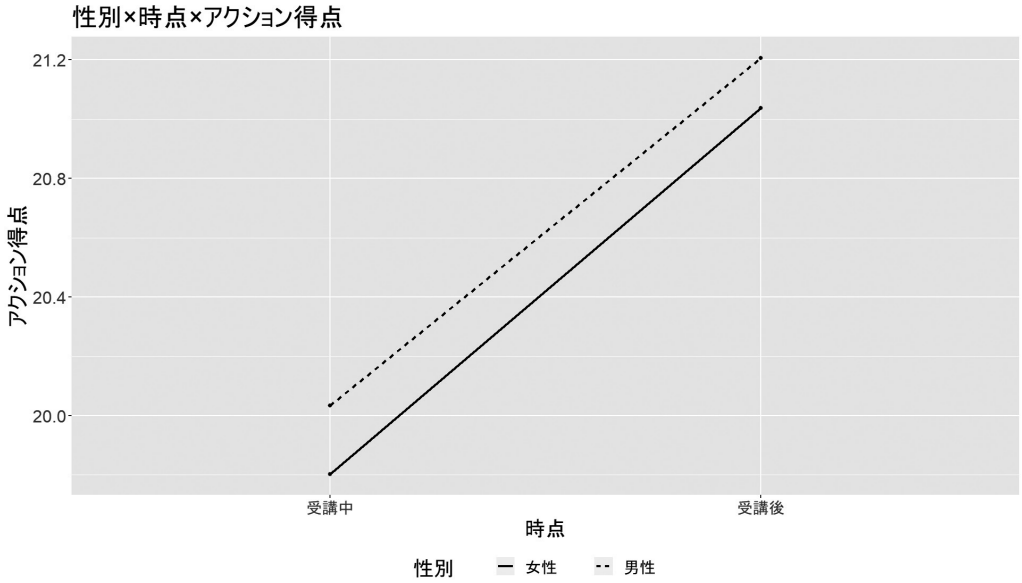

図２：性別×時点間のアクション得点

②年齢×時点間の推移

年齢での推移はどうだろうか。年齢では少々意外な結果が析出された。まず、ビジョン得点について、図３を見ると、20歳以上の方が、20歳未満よりもビジョン得点は高い傾向にある。就職活動が迫る年齢になると、自身の就職活動について考えざるを得なくなる結果、ビジョン得点が高くなるものと推測される。

翻って、アクション得点では異なる傾向がわかる。アクション得点はむしろ、初期値に関して20歳以上の方が低いのである。本稿のデータでは、年齢情報しかないため学年情報ではないが、一般入試における合格者中の浪人比率について、2022年度は23.2％であり、指定校・推薦・付属

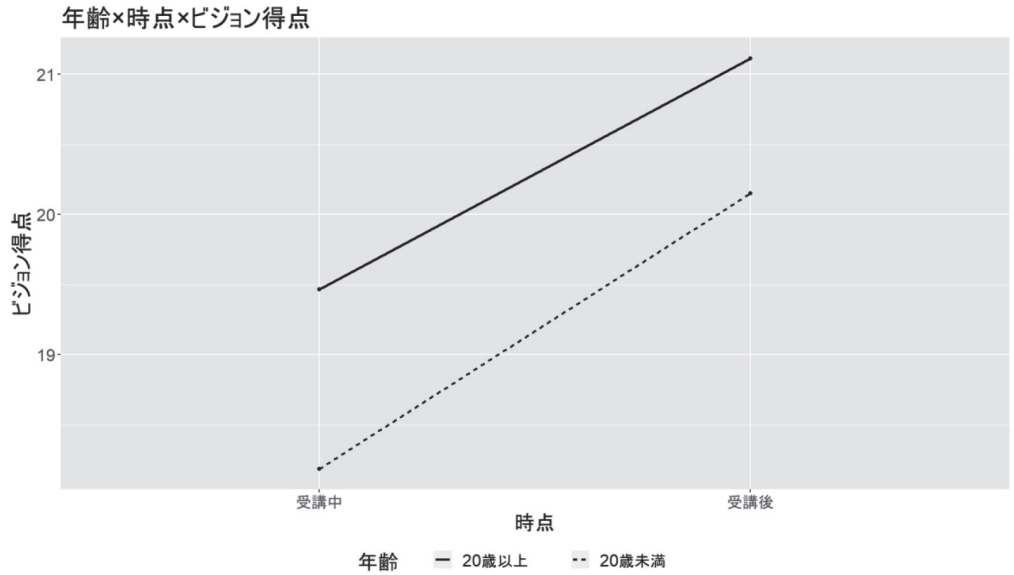

図３：年齢×時点×ビジョン得点の推移

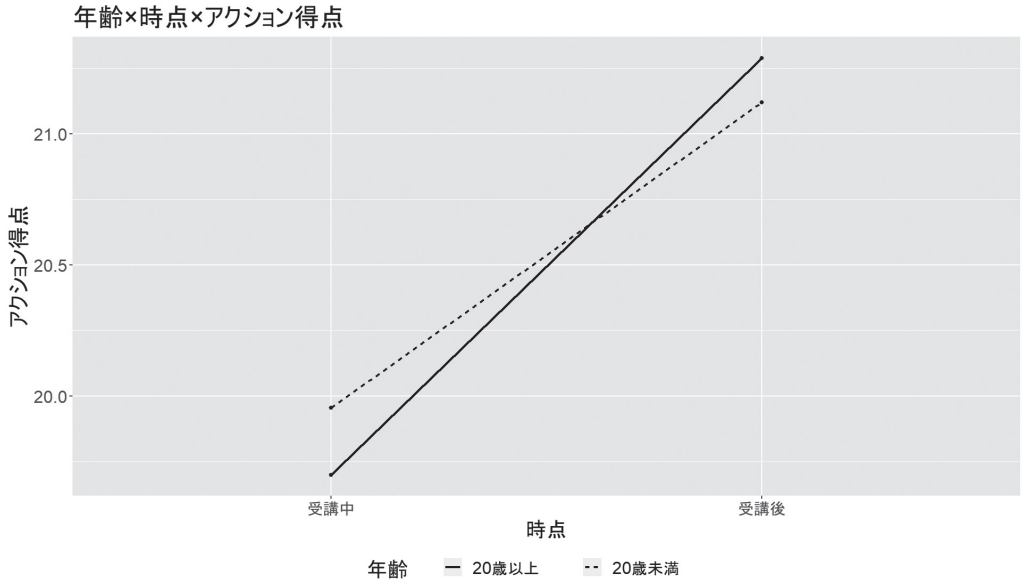

図４：年齢×時点×アクション得点の推移

校からの進学などを考慮すると、この比率は更に低下するものと考えられる。そうすると概ね、学年情報と見て差し支えないと考えられるが、そうだとすれば、学年が高いほどアクション得点の初期値が低いという傾向が出てくる。理由については定かではないが、高学年になるにつれ職業的キャリアについて考える機会は増える一方で、具体的な活動は未だ行っているとは限らない。そこで、就職活動における具体的行動の端緒をつかむのに、このような入門科目を受講し、その結果、具体的な行動に結びつきやすくなっているとも考えられる。逆に言えば、そのような活動見通しの

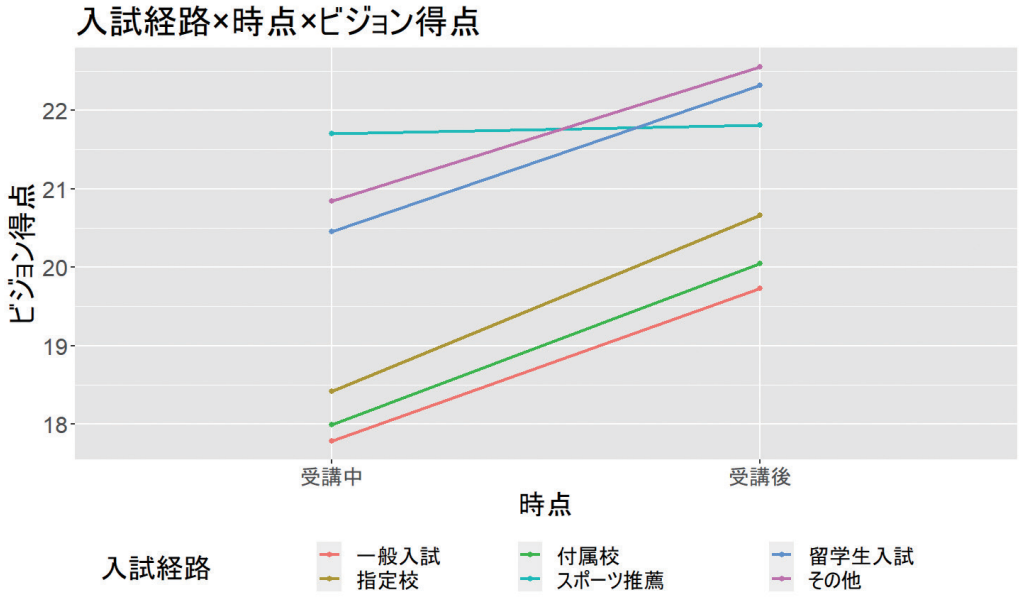

図 5：入試方法×時点×ビジョン得点の推移

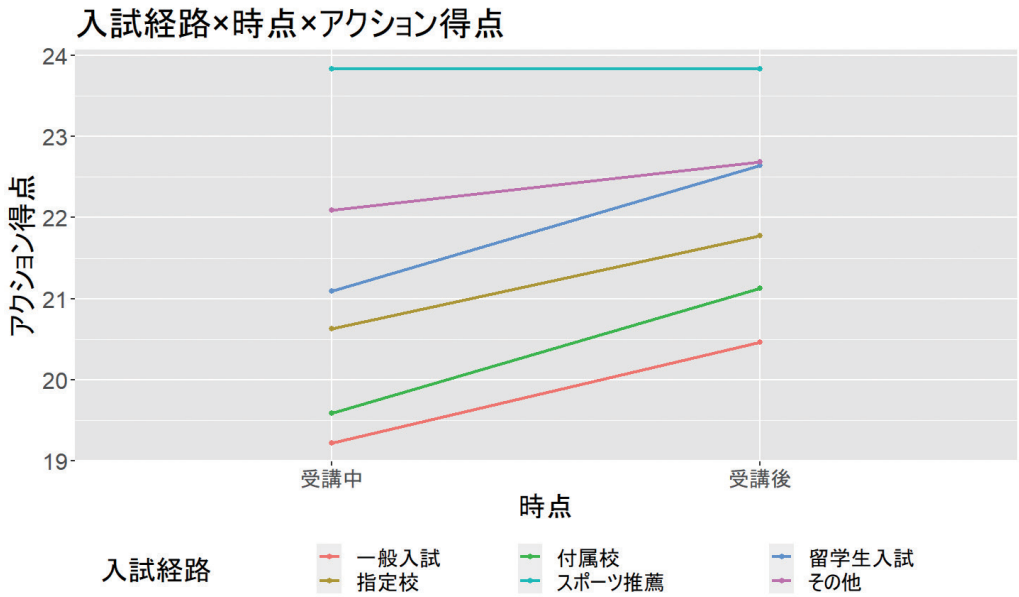

図 6：入試方法×時点×アクション得点の推移

ある学生はそもそも受講していないという選択バイアスが生じているとも考えられ、キャリア科目の効果については、「なんとなく意識はしているが具体的な活動には結びついていない」という層に特に効果的であるのかもしれない。

③入試経路

では、入試経路別ではどうだろうか。早稲田大学 大学総合研究センター（2020）では、卒後10年の追跡調査を行い、付属・系属校からの進学は、科目熱心度などで一般入試と比較して、その高さが明らかになっている。本稿でも、入試経路

別にビジョン得点とアクション得点の推移を確認する。入試経路は非常に多くのルートがあるため、大きな分類として、大学共通テスト利用も含めた外部・学力試験を一般入試とし、他も付属校、指定校、留学生入試、スポーツ推薦、その他に分類した。結果は図５および図６の通りである。

これを見ると特徴的なことに、スポーツ推薦入学の初期値の高さと変化の乏しさがうかがえる。スポーツ推薦組の初期値の高さと、キャリア教育科目の影響が少なく見られるのは、「体育会系ゆえに学業よりもスポーツの業績、そして場合によっては実業団などスポーツを起点とした学校から職業への接続」が経路として確立している一方、それゆえにスポーツでの業績即ち就職の業績達成という、一種のメリトクラティックな選抜が働いているのかもしれない。高卒就職においては、学業成績が校内での就職先の紹介にあたって選抜として機能する（苅谷　1989）と相似形の関係があるのかもしれない。

他方で、少なくとも付属校に関して、一般入試と比較してキャリア科目での優位性は確認されない。初期値も受講後のスコアも、それほど高くはない。早稲田大学 大学総合研究センター（2020）のケースとは異なり、キャリア科目は他の一般教養・専門科目と異なり、内発的動機からの動機づけがされにくいからかもしれない。

アクション得点についても確認する。アクション得点も、スポーツ推薦組の初期値の高さがより際立っていることを除いて、大きく傾向が変わらない。ビジョン得点で論じた通りだが、スポーツ推薦組のこの初期値の高さは、体育会系独自の要因から考察するほうが妥当である、と考えられる傾向である。

④志望度

志望度ではどうだろうか。志望度と入試経路は多くの場合、かなり相違があること予想される。表４は入試経路×志望度のクロス表だが、予想通り、外部からの一般入試の方が、第一志望比率が大きく下落している。特に、2022年度入学者はいまだ、定員厳格化の影響を受けているため、一般入試ルートでは第一志望比率が大きく異なる。これら、第二志望以下のグループでは、就職活動での「挽回」を期している可能性も考えられ、そのように考えれば、一般教養科目や専門科目と異なり、キャリア教育科目では第一志望入学者と比較しても、スコアが高くなると考えられる。

表4：入試方法×志望度のクロス表

	第一志望	第二志望	第三志望以降	N
一般入試	25.78%	33.49%	40.73%	1311
指定校	90.27%	7.39%	2.34%	555
付属校	94.85%	3.80%	1.34%	447
スポーツ推薦	90.70%	6.98%	2.33%	86
留学生入試	52.27%	25.00%	22.73%	44
その他	79.25%	13.21%	7.55%	106

図７・図８は、志望度別にみたビジョン得点（図７）・アクション得点（図８）の推移であるが、まず、ビジョン得点を確認するとやや興味深い傾向がうかがえる。ビジョン得点・アクション得点とも、事後で最も高いのは法政大学が第二志望だった学生である。特にアクション得点では、受講中：18.52から受講後20.52と大きく伸びている。他方、法政大学が第三志望以降だった学生は、アクション得点は18.41→20.02だが、ビジョン得点が事前：20.10→事後：20.94とほとんど伸びがなく、結果的に、受講後の効果でみれば最も緩やかな効果であった。木村他（2009）の研究によれば、第一志望以外での不本意入学群では、不本意入学後に奮起したグループと諦めグループいずれでも、卒業後進路の大学院進学割合が比較的、高くなっている。定員厳格化以降であっても、第二志望と異なり第三志望以降での入学は、大学院進学での挽回を比較的、期している層が多かったりしてキャリア教育科目への反応が弱くなりやすい、といったことがあるのかもしれない。

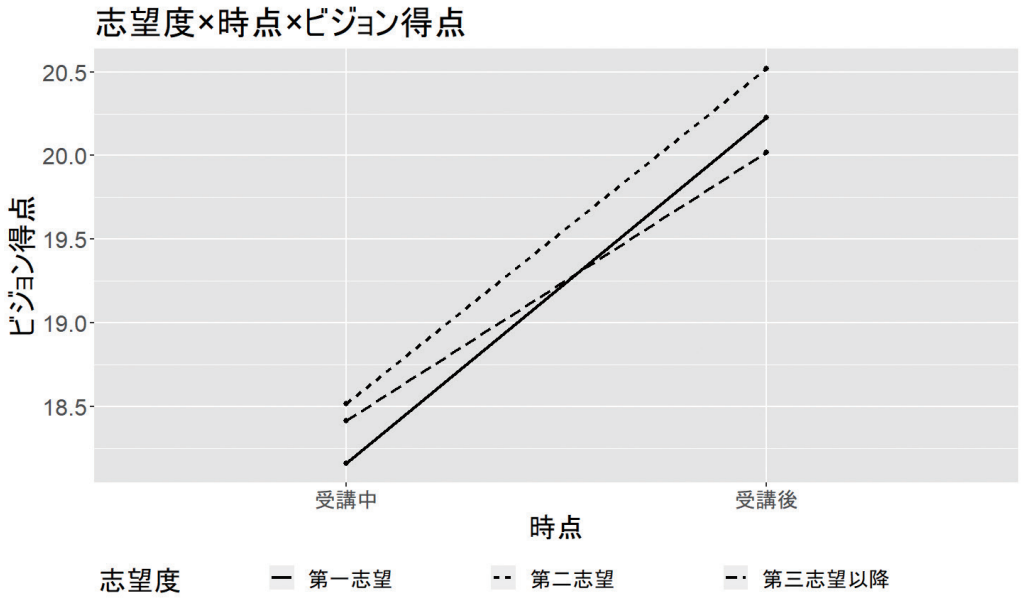

図 7：志望度×時点×ビジョン得点の推移

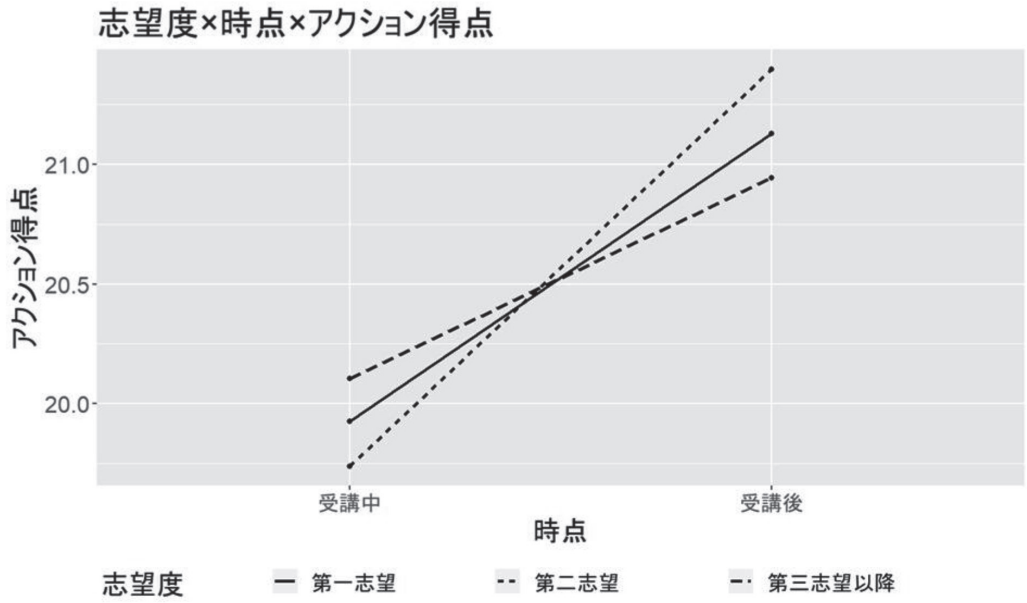

図 8：志望度×時点×アクション得点の推移

⑤学部

学部ではどうか。学部についてはカテゴリーが10と多いため、図表双方でその結果を示す。

結果を確認すると、やや意外なことがわかる。第一に、経営学部・経済学部・キャリアデザイン学部といった、比較的、企業への就職志向が強いと考えられる学部と、文学部や現代福祉学部といった比較的、企業への就職志向からの距離が遠いと考えられる学部との間に、目立った差がビジョン得点・アクション得点ともにないばかりか、ビジョン得点のキャリアデザイン学部のように、むしろ文学部を大きく下回るスコアの学部もある。もちろん、文学部の中からキャリア教育科目を履修するのは、文学部の中でも学部卒業後には進学よりも就職を考えている層である可能性が高いため、文学部の中でも就職志向の強い学生が履修している結果とも考えられる。逆に、キャリアデザイン学部の場合、わざわざキャリア教育科目を履修するのは、キャリアデザイン学部の中でも職業的アスピレーションやキャリア意識が相対的に低い層ということも考えられる。いずれかを判断することは難しいが、少なくとも本稿のデータからは、人文系と社会科学系でもそう大きく変わらないということが言える。

他方、伸び方に着目すると若干異なる傾向がうかがえる。ビジョン得点の伸び方が高い学部順に

表4

	ビジョン得点			アクション得点			
	受講中	受講後	得点変化	受講中	受講後	得点変化	N
スポーツ健康学部	21.20	22.79	1.59	21.41	22.92	1.51	192
現代福祉学部	19.18	20.95	1.78	20.31	21.27	0.96	253
文学部	18.95	20.85	1.90	20.36	21.70	1.33	100
人間環境学部	18.72	20.03	1.31	21.19	21.20	0.01	85
経営学部	18.69	19.98	1.28	19.98	20.95	0.97	184
経済学部	18.33	20.87	2.54	19.73	21.52	1.79	326
法学部	18.20	19.83	1.62	19.54	20.90	1.36	132
社会学部	18.19	20.13	1.94	19.42	20.60	1.18	574
国際文化学部	17.06	18.71	1.65	20.12	20.57	0.45	36
キャリアデザイン学部	15.48	19.65	4.18	19.73	21.35	1.62	34
全体	18.60	20.56	1.96	19.85	21.21	1.36	1916

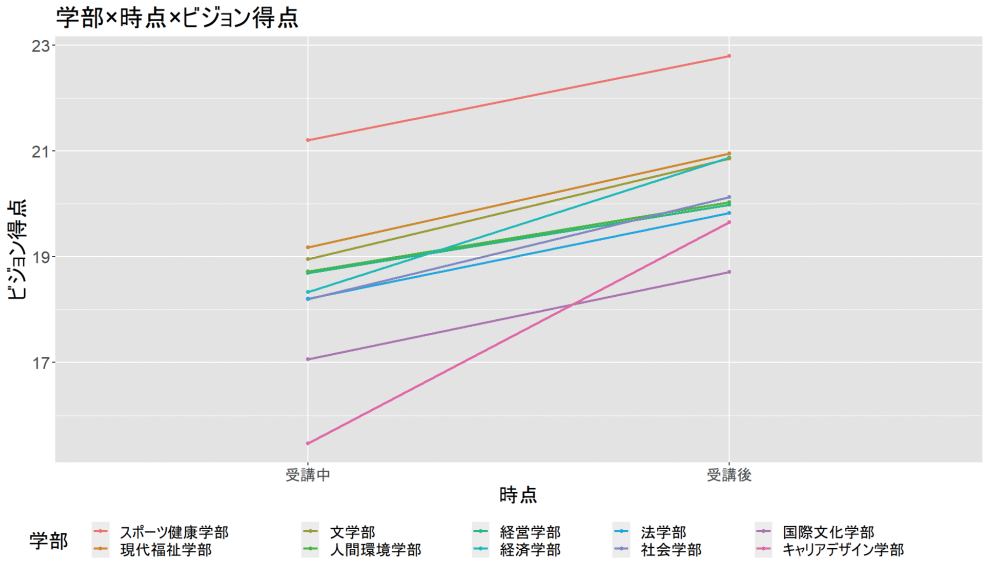

図９：学部×時点×ビジョン得点の推移

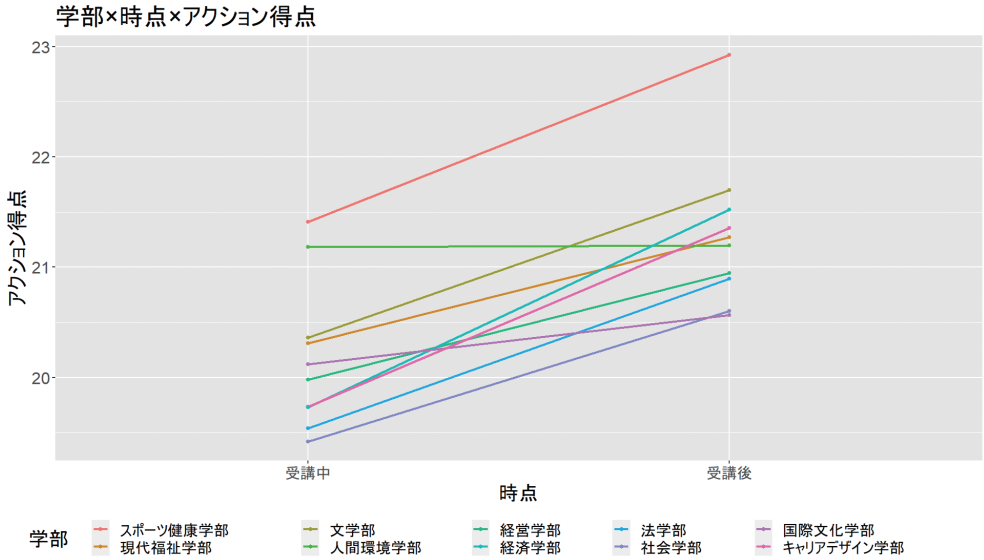

図 10：学部×時点×アクション得点の推移

並べると、キャリアデザイン学部、経済学部、社会学部、文学部、現代福祉学部、法学部、国際文化学部、法学部、スポーツ健康学部、人間環境学部、経営学部になり、アクション得点ではキャリアデザイン学部、経済学部、スポーツ健康学部、法学部、文学部、社会学部、現代福祉学部、経営学部、国際文化学部、人間環境学部の順になる。学際的な学部もあるため、人文・社会科学を一意に分類するのは難しいが、得点で言えばそれほど高くなかったキャリアデザイン学部や経済学部の伸び方が、ビジョン得点・アクション得点ともに一貫して急激であるのは特筆すべき内容だろう。ただし、経営学部のような経済学部とキャリアデザイン学部と類似した立ち位置にあると考えられる学部の得点変化は、緩やかである点もある。また、スポーツ健康学部のような、得点で見ても上位、得点変化でみても比較的上位である、独特な立ち位置の学部もある。一貫した傾向は見出しにくいが、少なくとも、キャリア教育科目において、水準と変化を識別する必要性が大きいこと、専攻分野によって一貫した傾向があるのではなく、専攻分野と重なりつつも、学部ごとに一貫しているという傾向であると言えるだろう。

5　結論

以上、本稿での分析結果をカテゴリー別に見てきたが、結果は以下のように要約できるだろう。

第一に、性別では男性の方が総じて、ビジョン得点もアクション得点も高いがこれは、性別役割分業に影響され、女性の方が初期キャリアの計画を描きにくいことが挙げられるだろう。

第二に、年齢別に必ずしも初期値は20歳以上の方が高いわけではないが、受講後は20歳以上の方がビジョン得点・アクション得点ともに高くなる。就職活動の時期が迫っているため、より有用さが感じられるためではないか、と考えられる。

第三に、入試経路別に見た場合にはスポーツ推薦での入学グループの高さが見て取れる。もちろん、受講後のビジョン得点のように場合によっては他の入試経路での入学者のほうが、得点が高くなる場合もあるが、総じて、初期値が高い傾向にある。

第四に、志望度では第三志望以降での入学グループでの効果があまり大きくはない傾向にある。不本意入学なのか、大学院進学での挽回などを期しているのか、詳細は不明だが、第二志望より志望度が低いほどあまり教育効果が高くない可

能性がある。

第五に、学部別の傾向で見るとあまり一貫した傾向は出ていない。また、学部によっては教育効果がそこまで高くない傾向があるなど、水準と変化率を区別する必要性が高いことを示唆する。

注

1） キャリア・アクション・ビジョン・テスト（CAVT）とは、下村・八幡・梅崎・田澤（2013）により開発されたキャリア意識を測定する尺度である。5件法（「そう思う」「ややそう思う」「どちらとも言えない」「あまりそう思わない」「そう思わない」）を用いている。同尺度は、アクション（項目例：「学外の様々な活動に熱心に取り組む」）、ビジョン（項目例:「将来のビジョンを明確にする」）の2因子から構成されている。

2） GPA の計算は、「キャリアデザイン入門」以外の科目の影響をコントロールするため、半期 22 単位科目登録をしているという仮定をおいて、「（2020 年度春学期 GPA 素点× 22）－キャリアデザイン入門の評価点 /20」で算出した。なお、第2回調査での未回答と落第とは必ずしも一致しないため、落第ダミーを別途、投入した。

参考文献または引用文献

平尾智隆（2019）「自然実験によるキャリア教育の効果測定―キャリア教育が大学生のキャリア意識に与える影響」『日本労働研究雑誌』No. 707, pp.79-92.

苅谷剛彦（1991）『学校・職業・選抜の社会学』東京大学出版会 .

木村 拓也・西郡 大・山田 礼子（2009）「高大接続情報を踏まえた「大学教育効果」の測定――潜在クラス分析を用いた追跡調査モデルの提案」『高等教育研究』12 巻 , pp.189-214.

葛城浩一（2008）「誰が『キャリア教育』を受けるのか」『大学論集』39 号 , pp.319-334.

小山治（2019）「初年次キャリア教育科目における学生の成長過程 ―「自己発見と大学生活」の履修者に対する質問紙調査」『高等教育フォーラム』Vol.9, 99-104.

倉元直樹・大津起夫（2011）「追跡調査に基づく東北大学 AO 入試の評価」『大学入試研究ジャーナル』No.21, 39-48.

桑原千幸・喜多敏博・合田美子・根本淳子・鈴木克明（2014）「初年次キャリア教育科目における相互評価 学習の実践と進路選択自己効力の向上」『日本教育工学会論文誌』38 巻2号 , pp.79-89

三輪哲（2014）「NFRJ-08Panel におけるウェイトによる脱落への対処」『家族社会学研究』26 巻2号 , pp.169-178.

宮田弘一（2020）「キャリア教育の効果に関する実証的分析：傾向スコア分析を用いて」『広島大学大学院人間社会科学研究科紀要』1号 , pp.741-749.

二宮祐（2022）「若者パネル調査におけるサンプル脱落―「学校通し」とインターネットモニターとの比較―」『大学経営政策研究』12 巻 , p. 293-308.

佐藤友美・杉本英晴（2015）「キャリア教育科目「自己開拓」の効果―2014 年度の授業について－」『中部大学教育研究』No.15,pp.19-28.

下村英雄・八幡成美・梅崎修・田澤実（2013）「キャリア意識の測定テスト（CATV）の開発」）

梅崎修・田澤実（編）「大学生の学びとキャリア―入学前から卒業までの継続調査」法政大学出版局 pp. 17-46.

浦坂純子（2012）「学校が担うキャリア教育・職業教育―『包括性』と『連携』をキーワードに」『社会政策』3巻第3号, pp. 25-40.

山口泰史（2021）「東大社研・高卒パネル調査（JLPS-H）における 初期脱落の影響とそれにともなうバイアスの補正」『東京大学社会科学研究所 パネル調査プロジェクト ディスカッションペーパーシリーズ』No.132.

早稲田大学　大学総合研究センター（2020）『2019 年度早稲田大学卒業生調査報告書』https://www.waseda.jp/inst/ches/assets/uploads/2020/08/2019_graduation-survey-report.pdf 2023 年2月9日閲覧

Measuring the Effectiveness of Career Education Courses Offered by Career Centers: A Study Using the Career Action-Vision Test

SETO Kentaro
TAZAWA Minoru
UMEZAKI Osamu
TAKEISHI Emiko
SAKAZUME Hiromi

In this study, we aimed to measure the effectiveness of a career education course for college students from various faculties. A total of 1,916 undergraduate students were asked about their career consciousness using the career action-vision test (CAVT) at the beginning and end of their course. The data collected were analyzed along with the participants' grade point average (GPA) data. In Study 1, the demographics of the participants who responded at the beginning of the course but did not respond at the end were identified; those with higher GPAs tended to stay engaged. In Study 2, CAVT scores at the beginning and end of the course were compared. Overall, participants demonstrated higher action and vision scores at the end than at the beginning of the course. However, further analysis by attributes revealed the following characteristics. Vision scores at the beginning of the course indicated that male participants had higher scores than female participants, and participants over 20 years of age had higher scores than those under 20. Participants who were admitted through sports recommendations had higher action and vision scores than those who admitted through entrance exams. Those who enrolled in the second choice also had higher action and vision scores at the end of the course. Furthermore, there were no considerable differences in action and vision scores by department. In summary, this study confirmed that the effectiveness of career education courses could vary depending on different attributes.